

[NK] 13:10～13:50

がん医療の質向上を目指した癌診療ガイドラインの普及と推奨内容の評価に関する研究



司会：西山 正彦 / 群馬大学・病態腫瘍薬理学

筆頭著者：平田 公一 / 札幌医科大学消化器、総合・乳腺、内分泌外科

がん診療の発展は目覚ましいものがあり、先達の見事な牽引力によって医学史に残した大きな功績も多くみられる。一方で近年、医療の質を評価する必要性と安全医療の提供に関する体制確立の必要性が国際的に叫ばれ、本邦でもその概念の普及と研究が遅ればせながら1990年代半ば頃に始まった。がん診療領域においては、EBM概念の導入とその実践に関わるがん診療ガイドラインの存在の是非について疑問が寄せられ、前進させようとする動向をはばむ傾向の方が強かった。1998年日本胃癌学会は胃癌標準治療検討委員会(中島聰總委員長)を設置し、がん領域では初めてガイドラインの検討とともにその発刊を目指した。演者は作成委員の一人として参加し、北米でのがん診療体制の変遷とがん診療ガイドラインの役割・効果について、またNCCNの代表者との交流の機会にガイドラインの作成体制及び作成方法を学ぶこととなった。間もなくして、日本癌治療学会は、北島政樹理事長の下、上記理念の達成を目標に佐治重豊先生の提案により、2002年「臨床腫瘍データベース委員会(佐治委員長)」を発足させた。演者は副委員長として、基盤作りに関わらせて頂いた。その後、委員会業務内容を関係者(医師)に理解して頂くために委員会名を「がん診療ガイドライン委員会」と改称し、演者が委員長を担当させて頂いた。2005年以来、厚生労働省科学指定研究(医療技術評価総合研究事業)の主任研究者を務めさせて頂き、本学会がん診療ガイドライン委員会の多大な支援も加わって4期に渡り、専門系学会を代表する多くの分担研究者の方々とがん診療ガイドライン理念の普及、その作成・更新・分析研究の促進を図った。その展開の基礎は福井次矢先生のEBM提案内容に準じた。併せて次世代の本邦医療体制に向けての提言として、日本の臨床腫瘍データの信憑性の担保の為にどのようなステップを踏むことが望まれるべきか、その為の課題抽出と解決の研究を重ねている。

日本が国際的に冠たる医療成績を示すことができるならば、日本の学術全体の発展に寄与すると考えられる。当該研究は、今後の医療メガデータ分析の基盤と発展の底流として信頼ある役割を果たしていることのできる段階に到達しつつある。多くの専門系学会・研究会の賢明な合意・協力の下、国民に信頼と安全の医療を提供できるよう更なる研究へと、このたびの機会を頂いたことについて関係者に謝意を表します。